

今日も「」あがり!

第57話 現場を支え、現場に支えられる! の巻



高垣達郎
(たかがき・たつろう)
1984年アメリカ生まれ、東京都大田区の町工場街で育つ。2011年に(株)ロボストスを創業し、農林水産業機械のワンオフ対応を軸に、独自のサービスを構築。A-1グランプリ2011グランプリを受賞。群馬県を拠点に、機械メーカー・ディーラー・農協・農業生産法人など、全国的に取引を拡大している。(株)ロボストス・代表取締役社長。

皆さん、こんにちは! イイ感じだったはずの女性から「なんか疲れちゃった」と言われてしまいましたロボストス高垣でございます。さて、気付かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、8月2日の日本農業新聞にロボストスの記事が掲載されました。嬉しいことに記事を見た多くの農家さんご連絡をくださったんですね。お会いしたことはない北海道・秋田・京都・埼玉の農家さんまで連絡をくださって、ロボストスの仕事を

支持してくれる方が各地にいることに本当に胸が熱くなりました。また、今月は本誌の読者さんとの熱い交流もありました。アジャスタブルスプレーヤを使ってくださっている北海道北見市の小野寺勇太さんもその一人。訪問するとご自宅のリビングに通してくださって、カボチャ畑でアジャスタブルが活躍した様子を写真で説明してくれて、二人でグータッチして盛り上がりましたよ! 現場の声が何よりのカンフル剤です。各地

を転々としていますので、気軽に「近くに来たら寄ってね!」とお声掛けいただけると嬉しく思います。ということ、今月は僕らの仕事の流れを見てみましょう!

すべての仕事は一発勝負

現場で計測して、部品を作り、寸分の狂いもなく組み立てるといいう、ドラえもんのような仕事”が理想です。例えば、「田植機を乗用管理機として使うためにトラクタータイヤを履かせたい」という

依頼——何度も行き来できないので、その場で始めましょう! まず実現したい輪距を聞いて、田植機のシャフトを測り、ホイールはリムの形状まで漏らさず測ります。必要な寸法はすべてiPhoneで撮ります。スマホを確認しながら、図面を描き起こし、詳細に設計していくわけです。「削り出す? 溶接する?」と製造条件を考えながら、「組み立て時に工具は届くか?」まで考える。部品の強度に迷えば近くのトラクターを見て参考にする。これで失敗したら仕方ないと思えるまで考え尽くしたら、最後は図面通りに仕上げるだけですね。ドキドキしながら組み立てて、無事に機能すればひと安心! ということで! 今日も一丁あがり〜〜



写真1: 田植機の寸法を隅々まで測っていく。悔いを残さぬよう心して測れ!



写真2: ディスクからリムからタイヤまで完全に寸法を把握することが確実な仕事の第一歩



写真3: 組み立て時の段取りや製造コストを考えながら、できる限りシンプルな形状を描く

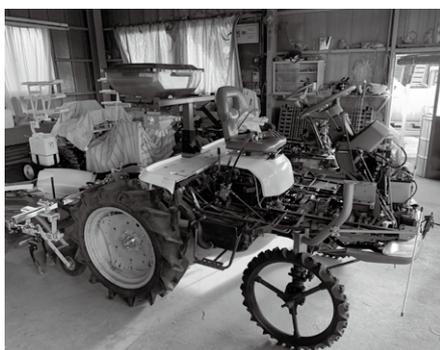


写真4: 1mmのズレもなく輪距120cmで組み立て完了! この田植機の改造はさらに続く……